



「チヨ子」 宮部 みゆき / 著

(生徒の感想) 僕がこの本を読んで思ったことは不思議な話だなあ…ということです。特に、小さいころに遊んでいたおもちゃが見えてしまうという場面では、ぼくが小さい頃遊んだおもちゃはなんだろうと思ってしまいました。最後の場面の万引きをしてしまった子どもと、その母親にくっついていた黒い手のことについては、とても気味が悪いと思いました。僕は黒い手に取りつかれないよう、しっかりとした人間になりたいと思いました。

(保護者の感想) 何かを大切にしたい思い出、何かを大好きになった思い出。誰にでもきつとある事で、その思い出を懐かしく思うことはよくあることだと思うけれど、それに守られて生きていると感じることはあまりないと思います。それに気づかせてくれたこの一冊に感謝したいなと思います。小さな頃大切にしていたおもちゃとの思い出だけでなく、子どもたちには学生時代の友人との関係も将来の自分を守ってくれる出会いであるようにと願う気持ちになりました。

(1B Tくん親子)

1. 2年生の保護者の皆様、家読へのご協力ありがとうございました。

「家読(うちどく)」の趣旨を理解され、お忙しい中、ご協力いただいた保護者の皆様に御礼申し上げます。心がポカポカするような素敵な感想が集まりました。紙面の関係で各クラス2家族の掲載しかできないことを申し訳なく思います。1冊の本を通して、家族のふれあいのひとときが生まれたのであればうれしいです。子どもも大人も何かと忙しい毎日ではありますが、これからもどうぞ、ご家庭での読書の機会を大切にしてほしいと願っています。ありがとうございました。

「千代に八千代に」重松 清 / 著

(生徒の感想) ‘友だちとは’、や友だちとの付き合い方について深く考えさせられました。この本に出てくる「わたし」と「ともちゃん」はどういった関係なのだろうか。千代さんと八千代さんは千代さんの一方的な関係にも見えるけれど、お互い理解しあっており、どちらもかけがえのない存在なのでは?と思いました。友情とはどちらかが一方的になるとそれは友だちとは言えないけれど、「友だち」の形態はそれぞれ異なるので、ことばでは表現できないと思いました。

(保護者の感想) この時期の子ども、まさにこの本の主人公のような中学生は、大人の心とは別のフクザツな‘ありよう’が心に広がっているのでしょうか。なんでもわかっている千代さんとそれもわかりながら生きようとしている八千代さんと、2人の関係に心がしめつけられます。最後は涙がでました。スミちゃんはどうするのだろうか。気になります。重松清さんの作品はいつも泣けます。「ビタミンF」などの名作、息子にも読んでほしいです。(1A Mくん親子)



「狐フェスティバル」瀬尾まいこ / 著

(生徒の感想) 私は新しく友だちになった子との友情がすごくいいなと思いました。田舎から見た都会と、都会から見た田舎で価値観が変わることを初めて知りました。伝統を守りながらも、新しいものを取り入れていくことは大切だと思ったので、私もそうしていきたいです。

「ガイド」小川 洋子 / 著

(生徒の感想) 僕はこの本を読んで、特に「題名屋」のナゾのおじさんに興味を持ちました。思い出に題名を付けてくれるこのおじさんに僕の思い出にも題名をつけてほしいです。今はコロナで学校生活の思い出が削られているけれど、これからの生活で仲間とのずっと残る思い出を作りたい。

(保護者の感想) この本を読んでいると、自然と目の前にその光景が浮かんでくるようでした。今はコロナ禍で旅行にも行けませんが、事態がよくなったら‘ママ’や‘僕’のガイドを聞きながら川下りをしてみたい、ただ川を眺めながら、ゆっくりと時間を楽しみたいと思いました。

「題名屋」のナゾの多いおじいさん…本当はどんな仕事をしているのか気になります。‘ママ’を想う‘僕’の優しい気持ちにも読んでいてほっこりとし、最後に新しい旗をプレゼントされた‘ママ’の顔が目には浮かぶようでした。(2A Rくん親子)

(保護者の感想) 久しぶりに夢中になって読みました。田舎と都会…私は東京からここ身延に嫁ぎ、花子の気持ちもわかりますが、田舎暮らし30年になった今、双方の心の交わりや動きが心に響いた。最後には花子がフェスティバル成功へ前のめりになっていく…。

私事ですが、私の町おこしの活動と似ている一面があると思えた。変えることと、変えてはいけない事の境目が大切。歩み寄りが大切と感じた。(2B Tさん親子)

裏面もご覧ください。

「自由読書」を選んだご家庭の感想

「犬部」 片野 ゆか／著 (ポプラ社)



(生徒の感想)この本を読んで、捨てられてしまった犬やねことか、他にもかわいそうな動物たちがたくさんいて、そういう動物たちを助けてあげようと活動している人がいるのがすごいと思いました。私は捨て犬や捨てねこを見ないです。だけど、困っている動物たちを助けてあげたい!という気持ちは強いので、犬部の人たちみたいなことがしてみたいと思いました。

(保護者の感想)命に大きい、小さいはない、生き物の命は大切にしないといけない。口でいうのは簡単ですが、実際に行動に起こすのはとても難しいことだと思います。犬や猫を助けるということは本当にステキな活動で、これからもあらゆる場面で続いてほしいと思います。この本を読み、命の尊さ、無償の愛の素晴らしさなどを感じることができました。そして登場する犬、猫、うさぎたちが本当にかわいらしかったです。

(1A Yさん親子)

「軍艦島入門」 黒沢 永紀／著 (実業之日本社)



(生徒の感想)軍艦島は名前だけで他のことは何も知りませんでした。本当は「はしま」というところらしいけれど、軍艦のようなので軍艦島というので、そういう理由なんだと思いました。軍艦島は色々なことが充実していて、その時代の最先端を行くところだったと思いました。日本人でもまだまだ同じ日本のことを知らないことがたくさんあるなと思いました。

(保護者の感想)テレビで軍艦島の事を見て、もっと知りたいと思い、この本を買いました。黒いダイヤの島として国内で最も質の高い石炭を産出し、製鉄に大きな貢献をした軍艦島。私が最も驚いたのが、島の暮らしについてです。世界最大の人口密度、昭和30年代で100%の電化生活、そして建物も国内最古の鉄筋コンクリートアパート、高層ビル。閉山して40年以上たち、廃墟となった今と昔を写真で見ることができました。もっと深く歴史を踏まえて知りたくなるそんな本でした。

(1B Sさん親子)

「十二国記 月の影・影の海」上・下

小野不由美／著 (新潮社)



(生徒の感想)主人公の陽子は弱気な女子高校生です。そのため性格は読み手がイヤになるほど愚かしいふるまいをしていました。大事な剣を投げ捨てる、裏切られた時には激しく憎悪する、着物を盗む勇気もありません。途中、素直な人物と出会い、自分のできることをしようと決意するのです。このあと「王になるか、日本に戻るか」で悩んでいるところがすごく共感できました。陽子の存在を自分に置き換え、自分はどうかのかと見つめなおすことができました。

(保護者の感想)この本は、私が学生の頃によく読んだ本です。久しぶりに読みなつかしく思ったと同時に、ワクワクしながらあっという間に読み終わりました。王の不には民のためになる人を天が決める。しかし、そういった人も道を踏みはずすこともある。人は「絶対」というものはないのかもしれない思いがしました。主人公の少女は裏切られたり、差別があったりつらい部分もありますが、優しい人、助けてくれる人にも会い、自分の信念や生き方を変えていく様子は圧倒されました。少女の強さに心が動かされます。またこの「十二国記」は別の王や麒麟の話もあり、娘にも読んでほしいと思いました。

(2A Kさん親子)

「多分そいつ、今ごろパフェとか食ってるよ。」

Jam／著 (サンクチュアリ出版)



(生徒の感想)ネットの情報、人間関係などで悩みがちでしたが、この本を読んで考え方を改めてみようと思えるようになりました。日常的なモヤモヤがかわいいイラストと一緒に書かれていてとても読みやすかったです。この本を参考にして、これからの生活に生かしていったり、悩んだときにはこの本を読んで心をおちつけたりしたいと思いました。

(保護者の感想)誰もが一度は感じるだろう「日常のモヤモヤ」を4コママンガでまとめてあり、読みやすかったです。思わず「うんうん、そうそう」とうなずく事が多く、同じようなことを思っている(考えている)人が多いことがわかりました。何気ないひとことが相手を傷つけてしまうことを改めて感じました。相手のことを考えて、行動、発言することって大切ですね。

(2B Sさん親子)